

筑前國續風土記 卷之十三目錄

鞍手郡

天照宮	普光玉寺	直方
雲心寺	山邊知古	頓野 尺々嶽
福地山	勝野	奈良津
木屋瀨	植木	眞如寺
劔岳	永滿寺	琢磨
赤地村	御德村 吉野山	境圃
金剛村 舞嶽	承樂寺	宮田
極樂寺	龍德村	若宮河內
若宮八幡宮	吉川河內	山王權現社
瑞石寺 金生村	湯原	清水寺
圓通院 山口村	長谷寺	上新入村
最明寺址	笠松	太閤道
內山寺	緣山	犬鳴山
大賀畑	蛤殼圃	

筑前國續風土記 卷之十三

貝原篤信選定

貝原好古編錄

竹田定直校正

鞍手郡

此郡東は豊前に境ひ、南は嘉摩穗波に向ひ、北は遠賀郡についき、西は山をへだて、宗像糟屋に隣る。

山高く大河流れて、山川の利少からず。土地肥饒にして五穀ゆたかに、草木蕃茂はんもし、薪材ともしからず。

國中にて上座郡とひとしく上郡とすべし。中について若宮吉川の河内は、山中にありて佳境也。此郡に上下あり。若宮吉川を上鞍手と云。兩鄉村數二十五皆山中にあり。宮田より下を下鞍手とす。下鞍手は大河の左右にある村多し。聖徳太子の傳に、守屋二男片野田連四男辰狐連等を筑前國鞍手に流す。和名抄に載る所、此郡の郷の名六あり。

金かな生ふ今は村の名に
のこれり。

二ふた田

生^{いく}見^み 今宮田村の枝村に生見あり。
新^{にい}分^{きた} 今も村の名にのこれり。
十^と市^ち 今も沼口村の枝村に十市あり。
田^た 今も粥田の庄とて數村あり。

今稱する所、此郡の村の名

脇^{わき}田村 脇田村の内
古^こ賀^が村 脇田村の内

安河内村 同上
縁^{へり}山田村 脇田村に屬す。新田村也。

金^{かな}生^ふ村 金生村に屬す。
福丸村 金生村に屬す。

如來田村 金生村の内
大地浦村 同上

原田村 原田村の内
友池村 原田村の内

下大隈村 古は小隈村といふ。
竹原村

原崎村 竹原村の内
下村

鉛^{なまり}村 下村の内
大河畑村 同上
小依村

小金原村 小依村の内
石宗村 同上

湯原村 湯原村に屬す。
五郎畑村

中畑村 同上
谷村 湯原村の内

乙野村 乙野村の内
草場村

山口村 古は下山口村といふ。
上山口村 山口村に屬す。

山下村 山口村の内
赤坂村 同上

本畑村

上山口村
の内

沼口村

都市村

沼口村
の内

平村

高野村

感田村

新延村

島村

新延村に
属す。

城越村

新延村
の内

長谷村

新延村に属す。
新田村也。

木月村

上木月村

木月村に
属す。

古門村

道中村

古門村
に属す。

神崎村

古門村
の内

倉久村

内山村
倉久村に
属す。

畑村

倉久村
の内

四郎丸村

萬願寺村

四郎丸村
の内

飯倉村
同上

長井鶴村

津留村
長井鶴村
の内

木屋瀬村

植木村

平村

植木村の内
此郡に平村といふ名二あり。

一本松村

同上
小牧村
の内

猪倉村

同上
芹田村
稻光村

恵比村

稻光村
の内
宮永村

黒丸村

清水村
黒丸村
の内

下新入村

別田村

下新入村
の内

神崎村

同上。此郡に
神崎村二あり。

知古付

阿比古村

知古村
の内

下有木村

上有木村

平山村

上有木村
の内

居屋谷村

同上

水原村

上新入村

鴨生田村

上新入村
の内

龜甲村 同上

龍徳村

粥田浦村

龍徳村
の内

竹馬村

同上

宮田村

脇野村

宮田村に
屬す。

生見村

宮内村
の内

千石原村

同上

頓野村

川北村

頓野村に
屬す。

川南村

同上

安入寺村

川南村
の内

西尾村

同上

内礪村

同上

南良津村

勝野村

草場村

勝野村に
屬す。

小竹村

勝野村
の内

金丸村

新北村

同上

長谷村

新北村に
屬す。

田崎村

新北村
の内

田頭村

同上

八尋村

古江村

八尋村
の内

中山村

山崎村

中山村の内

寶木村

野面村

山浦村

野面村の内

篠田村

金剛村

田口村

金剛村に屬す。

上境村

中泉村

上境村に屬す。

永満寺村

同上

畑村

同上。此郡に畑村二あり。

迎村

中泉村の内

川端村

同上

宅間村

永満寺村の内。琢磨とかくを正とす。

楠木村

同上

下境村

前鶴村

下境村の内

日陽村

磯光村の内

爲本村

同上

磯光村

日陽村

磯光村の内

赤地村

伊浦村

赤地村に屬す。

上大隈村

古は大隈村といふ。

鶴田村

水町村

鶴田村の内

山部村

尾崎村

山部村の内

本城村

御徳村

枇杷村

御徳村の内

新山崎村

兵段村

新山崎村の内

以上百三十七村

内 五十七 本村
八十 枝村 此内二新田村

○天照宮

磯光村にあり。俗説、天照大神といへども、いにしへ從五位下を授られたるを見れば、天照大神にあらず。瓊杵速日尊也。瓊杵速日尊を 天照大神といひたる事、舊事記にあり。いつのころよりか、八幡大神春日大明神をも相殿に祭りたてまつる。むかしは笠木山の上に鎮座ありしか共、老幼の輩參詣のわづらひあればとて、麓にうつす。宮田村の枝村千石原と云所の上、谷の中に今も其あとあり。今其所を佛谷といふ、是は山上に神社ありし時、稻の初穂を麓の谷にかけて祭りしゆゑ、穗懸ほかけといひしを、あやまり訛て佛谷といふなり。其後神勅ありて、鶴の一番住所に、遷座したまふべきとの御告あり。因て其瑞を見るに、鶴田村に白鶴雌雄二居ける所あり。終に其所を御廟地みやしろのと定む。今の神廟の地是也。此社むかしは鶴田村の境内也しが、磯光いそみつの田地、鶴田村の近邊にありて遠く、鶴田の圃、磯光の村際にありて遠かり

し故、たがひに耕作の便よろしからずとて、近年農民共各相替へて、其の地を耕作せり。故に天照宮のまします所は、むかしのまゝなれど、今は磯光村の境内となる。鶴田村も、本より天照宮の敷地也。鶴田といふも、白鶴田の中に栖し故、是に據りて村の名とすと云。大凡此御神は上代より鎮座ましく、往昔は御宮造もいかめしく、神領多くして、年中の祭禮其數しげく、祠官も數多ありて、是を勤行ひけるとかや。按ずるに、三代實錄に、陽成天皇元慶元年十二月十五日、筑前國正六位上天照神に、從五位下を授たまふとあり。此御神の事ならし。徳治三年造營有し棟札あり。延寶八年庚申に、敷地の人々相共にはかりて、新に神殿を改め作り。元祿六年直方の家臣、小川權左衛門氏信、石鳥居を創立す。さうりふ粥田庄の惣社にして、磯光、鶴田、龍徳、宮田、大隈、尾崎、ひやうたん兵段、皆天照宮の敷地なり。(以下一本二載ス)先年直方の領主黒田長清君の命をうけて、篤信縁記を作りて納めける。

○普光玉寺

礪光村ひなた日陽山の上にあり。村より登る事二町許あり。いにしへは大寺にて、七堂悉く備りたりと云。今は只毘沙門堂のみ残れり。山上に小池あり。是を手洗池といふ。常に水ありて炎旱えんかんにも乾かはかずと云。

○直方なよがた

此邑さと始は東蓮寺といへり。新入村の境内なり。此所に、そのかみ倉久村内山寺の末寺、東蓮寺といふ寺ありし故、邑の名とす。今は其寺なし。延寶三年に改めて直方と號す。是は東蓮寺の名宜しからざる故、其あたりなる小村の名をとりて名付らる。元和九年、長政公捐館えんくわんの前に遺命して、おほやけに申上、遠賀、鞍手、嘉摩、三郡の内にて、四十三村四萬石の地を分ちて、其末子東市正隆政に譲りあたへらる。在所は鞍手郡鷹取古城の邊、然るべきよし遺命し給ふ。寛永三年に忠之公の家臣、井上周防、吉田壹岐、鞍手郡の内にて隆政の居宅に成べき地形を尋て、楠橋くすはし、龍

德、下境など所々見そなはしけるが、終に此所に邑を定め、屋敷をかまへ、家作りをなす。家老諸士より以下、其四邊に宅をかまへて移りぬ。工商も亦おほく集り、町をたて、編戸へんこの民となり、各其家業をいとなむ。是より一ひとつの廣邑となる。然るに隆政寛永十六年、病をうけて棄世したまひ、子息なし。忠之公の二男之勝其あとをつげり。東市正に任す。之勝寛文三年に卒したまふ。直方四萬石の地は、元來長政公に給りし本領の内なれば、其後公命有て福岡に返したまはりぬ。元祿元年、國主光之公台命を請て、次男黒田長清公に新田五萬石の地を分ち與へ、直方に居らしむ。同五年、長清おほやけに申上、舊宅の地を改め、妙見山に新宅をたて、住給ふ。

(前二云云ヨリ來遊シ給フマデ一本ニ歟ス)

前に堀をほり、大堤を築て堅とす。館の東、林樹蒼鬱として、喬木雲を凌ぎて生茂れり。木のもとより道一筋ありて、南にめぐり北に轉じ、五六町をへて竹の林に至り、柴門南に向ひて一境あり。草ふける

屋あり。靜養の所とし給ふ。西のつゝら折を登りて、たかくたてる一字あり。卓爾亭と稱す。亭に登りて、東をのぞめば、本郡の高山數峯つらなり、北は遠賀の海濱、蘆屋洋まで遠く見ゆ。光之公綱政公も、かつて爰に來遊し給ふ。

むかし、此所に在し妙見の社は、北の山に移さる。元祿年中、社人青山祝部が願により、いにしへの神名にかへりて、多賀大明神と改む。其額は油小路大納言隆貞卿の筆なり。

○雲心寺 禪宗濟下

積翠山と號す。山邊村の境内にあり。開山は大德寺の江月和尙にして、崇福寺の末寺也。寛永年中に立。前市正隆政長政公の四男、寛永十六年十一月十三日に卒。法名宗丁。後市正之勝忠之公の二男、寛文三年七月廿五日に卒。法名宗堅。の墓所位牌あり。隆政じゅんし殉死人の石碑もあり。寺産六十石、之勝より寄進したまふ。

○山邊 知古

此兩村むかしは新入の枝村なりしに、寛永十六年始

て別村となる。

○頓とん野の 尺嶽しゃくのだけ

大邑也。村中に河流れ、其東に山高くして、境内甚廣し。好村也。此村のおくに尺嶽あり。高山也。頓野に屬せり。尺嶽の北に舞嶽あり。是亦高山也。

○福地山

又福智嶽とも云。高山也。直方のひがし、鷹取山の東にあり、谷をへだてたり。

頓野村にあり。此山の峯を豊前筑前の境とす。鷹取山は直方の東にむかへる高山也。福智山は高取山の東にありて谷をへだてたり。高取山よりは猶はるかに高し。むかし福智の頂に社あり。福智權現と號す。彦山同神也と云。此社豊筑兩國の境に立たれば、乾の方の柱檐はしらあきなどは筑前に屬せり。故に兩國より尊び祭れる神也。然るに高山の上に在て、老幼の參詣なやみあり。殊に祭禮の便あしければとて、明暦年中、此山の西の半腹、内うちが磯そと云所に社をたて、祭れり。豊前にも亦、上野村あがのに下して社を立たり。是よりして豊前筑前兩方に同社ありて相わかれ、各其祭をつと

む。今は山上に神社なし。十月十二日恒例の祭禮あり。山下に御旅所有て、神輿渡御あり。遠近の人つどひて、いとにぎはしき祭禮なり。

○勝野

此村むかしは野原にて民家なし。近代村落そんらくをなせり。龍徳村龍岳の城主杉氏と、御徳村ごとく權現山の城主何某がしと、たび／＼合戦ありしに、杉氏毎度此所にて、勝利を得し故に、勝野と號す。村中に麻生殿塚と、土民の稱する墓あり。是權現山の城主なりし人にや。又馬塚と云あり。是もむかし合戦のありし時、馬を埋し所也とかや。又新山崎村も慶長五年に初て立し村也。

○奈良津

此村むかしは、大川のはた、土堤どてぎはにあり。延寶四年洪水の患をさけて、今の所にうつせり。

○木屋瀬

むかし勝光上人穗波郡明星寺再興の時、豊後臼杵家より、材木を寄附しけるを船につみ、蘆屋川より上

せ、此所の河邊に木屋をかけて入置ける。其所を木屋の瀬と云。今は他國通路つうろの宿驛と成て、民家多し。

○植 木

東北の方黒崎、木屋瀬を過て、爰に來り、西の方へ通る宿驛也。此地にも邦君の行館あり。是より赤間へ行く。民家多し。町の後うしろなる所に、倡優わさおきのすむ町あり。家數三十軒程あり。是空也上人を祖とし、專九品念佛をのみ修行せり。村中の田の字に、九品田と云所あり。是九品念佛の料田なりしにや。今は歌舞傀儡かぶくわいらいを以て其業わざとす。博多聖福寺の寺中、志摩郡泊村の大日、遠賀郡蘆屋の念佛の類なり。此地の倡優は、聖福寺の名をかりて、寺中と號す。又町の西に大池あり。南北五町、東西四町許あり。水多くして、國中にて凡二三の大塘なり。下の田地を浸す。此池に蓮、芡みづぶき實多し。

○眞 如 寺

淨土宗鎮西派、宮田村極樂寺の末寺

高尾山と號す。植木町にあり。長政公の時より寺領十石寄附せらる。

○劔つるぎ

岳だけ

此山鞍手郡の中央に只一あり。故に中山共云。

中山村にあり。村より七町ある坂を登る。山上に劔つるぎ大明神の社あり。故に劔岳と號す。社は巽に向へり。凡此邊に、劔大明神を祭る社八所有。中山村、新入、龍德、新北にきた、新延にのぶ、下木月、遠賀の本城村也。

○永満寺天台宗

大興山往生院と號す。後改て双林院といふ。此寺ある故に、村の名をも永満寺と號す。元は上境村に屬せり。開基の時代詳ならず。比叡山の末寺也。鷹取山のふもとにあり。天文八年、大内家より九町七段の寺領を寄附せられし寄附狀あり。凡此村山中閑寂の地にして、世俗の塵埃をはなる。此寺元祿十一年直方へうつさる。直方の先君黒田之勝より寺領十石寄附し給ふ。

○琢たく

磨ま

永満寺の枝邑に琢磨と云村あり。此村に琢磨山西福寺といへる曹洞宗の寺あり。是豊前國田河郡興國寺

の末寺也。山中にありて、いと閑寂なる寺院也。

○赤地村

赤地村の東の川は、豊前田河郡より出、上境下境と中泉村との間を流れ、直方の町の東にて、嘉摩川と一になる。嘉摩川より水やゝすくなし。されども是亦大川也。舟ものぼる。赤地村は兩川の間に在。

○御徳村 吉野山

元和元年より同四年に至て立たる村也。此枝村に吉野村あり。村翁の説に、むかし大和國吉野より、吉野殿と云人來りて居住せり。故に村の名を吉野と云といへり。今案するに、吉野に南朝有て、肥後の菊池氏南朝に屬し、此國の内までうらしたがへしかば、吉野より南朝の人こゝに來り住るならん。吉野の藏王權現をも其人勸請せしなるべし。初其社ありし所は、今は權現山と云。其後彼山をいかなる人か城を築きし時、藏王權現を西の方の小山に移して、又此所を今吉野山と名づく。むかしの藏王權現のやしろ

ありし吉野山にはあらず。今の吉野山の下、民家のある所を吉野と云。今は御徳ごとくの枝邑也。藏王權現と一社に妙見をも祭れり。

○境 圃

上境下境村にあり。此圃すぐれて肥饒の地也。怡土郡井原村の境圃と名をひとしうし、何も國中無類の良地りやうなり。此所に紅花を多く作る。上境よりは下境の圃尤も廣し。田川河の東に在。

○金 剛 村

此村の東に舞嶽と云高山あり。篠田さいた金剛の上なり。前に指出たる山也。其上に舞嶽權現の社あり。いかなる神を祭し所にや、村老の云傳へもなし。剛の谷と云所あり。むかし此所に、金剛寺と云寺ありし故、村の名をも金剛と云。此寺むかしは繁榮の所なりしが、いつの比にや、亂國の時強盜がうたう入て、寺中を侵をかし掠かすむ。寺に多く在し兒共、打つれ逃落たりしを追討にして、此所に埋し墓あり。是に依て其地を兒が原

と云。又同谷に、尼寺の跡及墓所あり。此村及篠田村、中比は香月村に屬して、遠賀郡也。近き比より鞍手郡に屬して、香月の枝村とは稱せず。其地勢を見るに、鞍手に入し事むべなり。蓋古は鞍手に屬せしを、中比亂世の時、故ありて、遠賀郡香月に屬せしなるべし。

○承樂寺

福壽山と號す。篠田村にあり。本尊の藥師佛は、行基の作と云。阿彌陀、四天王、十二神等もあり。村民の云傳へには、越前國みねの藥師、山城國篠谷の藥師、此藥師と合て三體、共に一木にて行基刻めりと云。

○宮田

宮田、龍德、新入しんにふの三村は、若宮河内の入口なり。新入を下口とし、宮田を上口とし、龍德は其中にあり。三村共に兩山の間にあり。よき村なり。若宮、吉川、大賀畑の川上にて一に落あひ、宮田、龍德、新入の山間を過て、木屋瀬にいたり。大川と一になる。

宮田迄は水深き故、川舟登る、此邊の農は、米を宮田に出し、舟につみ蘆屋へ下す。近年は下に堰手出來て、宮田に舟のぼらす。宮田村の境内に、大なる石窟あり。南に向へり。宮田より西にあり。其内廣さ八疊敷許、入口せばからず。内に石佛、十六羅漢あり。今は十三四あり。目鼻のかたちなど、今はたしかならず。宮田より長井鶴の方に四町許ゆき、道より十間ばかり右の方、高き所にあり。何人の造立せしにや、しれず。

○極樂寺 淨土宗鎮西派

光明山と號す。宮田村にあり。知恩院の末寺也。開基の時代詳ならず。古寺なりといへり。慶長十六年に、長政公二百石の寺産を寄附し給ひしが、其後故有て絶たり。黒田隆政、其母公大涼院^{長政の夫人}のため、假なる墓所を築き、位牌を安置して、月毎に拜禮あり。葬し地にはあらず。是に依、又五十石の寺産を寄附せらる。

○龍德村

宮田の下、谷の間にあり。此邊に六嶽と云大なる山あり。六峯あり。遠所よりよく見ゆ。此村及室木、本城の三村にかゝる。

○若宮河内

倉久、四郎丸、上有木、下有木、芹田、かな原田、かな金丸、水原、竹丸、高野、平村、黒丸、かなふ金生、福丸、岩野、伊賀利、此二所は、尾井鶴村の枝村なり。所田、宮田村の枝村也。惠比、稲光の枝村也。古門、以上十九村、是を若宮河内とす。若宮河内は山中にありて、鞍手郡の最奥區也。山めぐり川流れて、よき境地也。其境内、水原村に若宮八幡ましくて、郷中の總社なり。故に郷の總名を若宮と號す。其川は山口村、黒丸村より兩川流れ出、福丸にて吉川河と一になる。

○若宮八幡宮

水原村にあり。是仁德天皇を祭れる社なり。仁德帝は八幡の御子なる故、若宮と稱す。或村翁の言傳へ

には、元久の比、金子小次郎と云し者、惡源太義平を神に祝ひ、若宮八幡と云。是ひが事也。信すべからずといふ。近古、内藤美濃守と云し人、神殿を再興せり。寛永年中に、村民其頽破をなげきて修造せり。

此社は若宮河内の惣社也。

若宮河内も此社あるに依て、其名とす。むかしは

社領多く附たりしが、今はなし。されども數村の産靈なれば、人々寄つどひ、御社を修理する故に、破壊のうれへなし。八月十六日祭禮あり。昨日より、遠方の人、其近里の諸村に多く來り宿す。近村の人は、今日來り集りて參詣し、主の饗をうくる者夥し。流鏑馬あり。相撲あり。商人多く來りて、色々の物をうる。又二月初卯の日にも祭あり。是又人多く集る。水原村は、むかしは今の八幡宮の邊、田の中にあり。寛文十年今の地にうつる。

○吉川河内

下村、湯原、脇田、乙野、小伏、縁山、へり凡六村、是を吉川河内と云ふ。むかしは五村也。近年縁山出來て

加る。吉川は若宮河内とならべり。其間に、金原こがねといふ長き原をへだてたり。吉川河は、源は犬鳴山より出、脇田、湯原、小伏を過て、福丸にて若宮川と一になる。長政公此邊に遊獵して、よりく、吉川の内下村の農長、次郎右衛門の家に宿し給へり。光之公も其子孫の家に宿し給ふ事あり。

○山王權現社

下村にあり。吉川河内六村の總社也。いつの時勸請せしにや、年代詳ならず。初て鎮座の地を比叡崎と云。江州の山王の地にかたどれる名也。九月二十一日祭あり。人多く集る。又三申の祭とて、四月の申の日祭あり。申の日二あれば、次の申を用ひ。三あれば、中の申を用ゆ。應安元年建立の棟札あり。文明九年に大内家の臣、宗掃部丞盛秀と云者、此邊を守護せし時、總政所藤右京進安房と云者、修覆を加ふ。其後頽破せしを、大永七年、大村又四郎興景といふ者建立せり。又天正十三年、松井越後守秀郷と云者建

立す。寛文十一年に、吉川郷の産子ども寄つどひ、今の宮所に、新に神宮を建立して移し奉る。社地高き所にありて、石階をのぼる。上には眺望目をよるこばしめ、下には水流いさぎよし。

○瑞石寺 曹洞宗

丹鳳山と號す。楠谷と云所にあり。金生村かなふに屬す。原田村より一里にちかし。門前に民家少あり。されども里に遠く、山谷の奥ふかき所にありて、いと物すごき境地なり。沙門は樹下石上の居住こそ本意なれば、誠に寺院によろしき所也。もろこしの書に、凡寺院は多くは深山幽谷の佳境にありといへり。吾が日の本にても亦かくのごとし。此寺の閑寂かんせきなる事、見るたびに感賞せずといふ事なし。タマシヒハシメ神傷タマシヒハシメ山行深タマシヒハシメ憂タマシヒハシメ破タマシヒハシメ崖寺古タマシヒハシメと杜少陵が作りしも、かゝる所なるべし。此寺は豊後泉福寺無着和尚の法嗣。天真和尚の開基の地にして、今に泉福寺の末寺也。庭前に、高さ三尺ばかり烏帽子のごとき石あり。此石天真彦山より携

へ来る。瑞を現する事あり。是に依て瑞石寺と稱す。小早川隆景の時、寺のほとりなる山林二十萬坪寄附せらる。其後長政公より以來、代々先例のごとく寄附有て、是を以て寺産とせり。長政公の證文判形有。此寺に古き法衣あり。無著和尚の傳ふる所也。此寺の末寺、諸所に七箇寺あり。

○湯原^{はら}村

糟屋郡篠栗より、山を越て此村に來れば、篠栗より萩の尾へ一里、萩の尾より源原へ二里有。脇田村の西のはづれに、むかし温泉ありしといふ所あり。其所より、今も冬は温泉流出づ。間近く二所あり。其上に藥師堂あり。其邊の田の字を湯寺と云。あまな今は温泉は埋もれてなし。湯原は脇田の川向ひなれば、此所も温泉ありて、湯原と名付けるならし。

○清水寺 眞言宗

青龍山と號す。黒丸村にあり。仁和寺の末寺也。住僧あり。本尊千手觀音なり。行基開基の地にして、

本尊も行基の作と云傳へり。むかしは僧坊十二區ありしと云。其名今に残れり。仲坊、奥坊、寶積坊、田井坊、向坊、理性坊、實相坊、前鬼坊、奥園坊、密乘坊、道達坊、檢校坊、此寺、若宮河内のいと高き所にあり。若宮、吉川の諸村眼下に見え渡り、佳景也。此山の上に、鷹を網にて取し所あり。

○山口村 圓通院

曹洞宗、宗像郡大穗村
宗生寺の末寺なり。

聖音山と號す。山口村の内にあり。天文廿年、大内義隆、其權臣陶尾張寺晴賢入道全姜の爲に弑せらる。此時宗像大宮司氏男は、防州に往て義隆の爲に忠戦せしかども叶はず。義隆のあとをしたひて行しに、敵あとより來り、氷上といふ所にて討死せり。陶全姜の姪のうみし、前宗像大宮司正氏の子、四郎氏貞を、陶がはからひにて、大宮司が家をつがすべしとて、天文二十年九月十二日、宗像に下す。家像の家人同心せざる者多し。氏男の弟千松當年三歳なりしを、宗像の家臣等、是を氏男の後室の養子とし、氏男の跡をつがしめんとす。其父前大宮司氏續も是を悦んで、

其儀を立んとす。陶全姜是を聞いて、いそぎ先氏續と千代松をころすべしと、氏貞の家人寺内治部丞に命じて云遣はす。氏續は是を聞て、早く逃去つて彦山に隠れしを、其をひ土橋氏康、多勢を以て攻殺さんより、我ゆきてひそかに殺すべしとて、是をのぞんで行しが、終に其伯父を殺す。千代松が母は氏續が妾也。其名を辨と云。千代松をいだきて、鞍手郡沼口にかくれ居けるが、討手の來るよしをきゝて、落行けるを、山口村にて追付、千代松をわたすべきよし、しきりにいへども、抱きてはなさず。母子共に殺しける。其かばねを此所に葬る。千代松の墓此所にあり。後年に、山田の後室の、怨靈のたゞりをやめん爲に、氏貞の内室の命にて、千代松が靈をも神にいはひ、今宮殿と號す。今も山口村の枝村畑と云所の、山ふかき林の中に社あり。又山口村に寺を立、氏續千代松父子の菩提をとむらふ。其寺を圓通院と號す。千代松の位牌此寺にあり。長政公入國の後、此村をば大音六

左衛門法名宗閑

に給りける。采地の内、田畠少々圓通院へ

寄附して寺産とす。又其寺のうしろの野山一萬坪を、長政公へ申て、此寺に付けり。今も寺に屬せり。松、かへで、椎及雜木繁榮して茂山となれり。大栗、椎などの山果多し。冬は林中に紅葉多く、嵐に隨ひて錦をひるがへせり。今の住持普禪、高き所をならし、宅地をひろめ、佛堂を改め作れり。又觀音堂を新に作る。かゝる僻地へきの山中には、又たぐひすくなき梵刹ぼんせつ也。大音氏代々の位牌をも此寺に安置せり。

○長谷寺 淨土宗鎮西派

新北村にきたの枝邑長谷はせと云所にあり。

本村より半里あり。龜甲山と

號す。本尊十一面觀音、行基作といひ傳へたり。そのかみ、大和國長谷の萬貨坊といふ僧、此地に來りて寺を建立せり。其形勢大和の長谷はせを模うつせしと云。或說に、聖武帝大和の長谷寺を立給ひて後、徳道上人に詔し、國々に新長谷寺を立らるといふ。此寺も此時立しにや。むかしは眞言宗なりしが、中頃退轉し、

近代淨土宗の寺を再興せり。植木村眞如寺の末寺也。此寺に千本ひのき檜とて、本一本にして末茂れる木あり。此寺むかしは繁榮の所にて、五百石の寺領あり。僧坊も六區在しと云。今におゐて其跡あり。六坊は伊屋坊、橋爪坊、池田坊、谷坊、水上坊、尾園坊あり。盜賊のために焼れて、今は只一坊残れり。十一月十三日に祭あり。此寺に大なる古き太鼓あり。いにしへ繁榮の時のものなるべし。

○上新入村

此村より、同郡奈良津へ行道を、へうたん越と云。此村の枝村、鴨生田かまふだと云處に馬頭觀音あり。高倉山高藏寺と云古寺のあとにあり。秘佛也。

○最明寺址

四郎丸村の枝邑にあり。むかしは最明寺と云寺ありしといふ。今は只藥師堂のみ残れり。最明寺時賴廻國の時、この寺に宿せられしにより、最明寺と號せしと云。いぶかし。

○笠 松

四郎丸村の田の字に笠松と云所あり。あざなむかしは大なる松樹ありしといへども、今は枯てなし。村人の云傳へには、神功皇后異國退治の前、此所を通らせ給ひ、御笠を掛給ひし故、笠松と號せしと云。

○太閣道

四郎丸村、倉久村の境なり。道を太閣道といふ。秀吉公朝鮮征伐のため、肥前名護屋に下り給ふ時、通り給ひし故此名あり。昔の道筋は、蘆屋より鞍手郡古門へ行、それより南の嶺を越えて、四郎丸、倉久へ下り、四郎丸の枝村満願寺の邊より、又西の方の高き山に上り、下りて赤間の驛の東へ出づ。是秀吉公の通りたまひし古道也。又上有木村より、宗像郡藤原村へ越す山路を、赤木越と云。其間一里あり。今古門、植木より赤間へ通る谷間の道は、長谷村の境内也。猿田たうげといふ。さんだたうげと云は誤なり。是は長政公入國以後に造れる新道なり。

○内山村

靈松山と號す。倉久村にあり。むかしは大寺にして、高野山發光院の末寺たりしと云。今は佛堂のみ残れり。かたはら側に山伏住して香花を供ふ。本尊は不動明王なりしが、天正の初、野火にて炎上せり。慶長三年の冬、京の佛師松月をして、新に不動の像を刻彫こくとうせしめて安置せしに、盜人取て今はなし。其後末寺仲山寺頽破せしが、彼寺の本尊不動、毘沙門、豐前國京都郡等覺寺
玄照法師が作なり。觀音を取て爰に安置す。むかしは下坊、仲山寺、東蓮寺、萬願寺、高野山など云末寺ありしが、今は皆廢絶せり。寺中に清水あり。是むかしは御手洗及阿闍水に用ひしと云。鎮守は山王權現、寶滿明神也といへども、今は社なし。大門など云舊址あり。又内山と云所の田の中に森にあり。里民は行基の母の墓所也と云。いぶかし。

○縁へり 山

此村、慶長年中に、農人三人始て來り住す。今は十戸あり。山高く谷深くして、冬は雪ふかく、はなはだ寒

炭薪を販^{ひさぎ}て産とす。此村も吉川に屬す。されども本より土地の神ありて、吉川の山王をば祭らず。脇田より縁山に上る嶺を、櫻たうげといふ。縁山の上、東の山を菅嶽^{すが}といふ。

○犬鳴山

脇田村の内也。脇田村より川にそふて登る。石多くして路あやうし。此山をすべて火平^{ひのひら}と云。高山也。むかしは美材多く麻のごとく立て、白晝といへども闇かりしが、今は林木すくなし。此地にて近年炭をやき、紙をすき、瓷器^{じき}を作る。船の櫓^ろ柁^{かぢ}等も此山よりいづ。今の紙をすき炭をやく所、大河内といふ。是本谷也。是より谷にしたがひ山を越え、糟屋の伊野へ行、一里廿五町あり。薦野へも行、一里六町あり。道よし。犬鳴と云山谷は、今紙すきの居る所より四町、東脇田の西より登れば、左の方に水の流れ出る谷あり。是より西へ上りゆく。左右の山を犬鳴山と云。たうげを犬鳴越と云。糟屋の久原に出る。此間坂あ

り。けはしく難所也。又脇田より數町西へゆけば、犬鳴の瀧あり。其瀧かさなれり。小流也。たうげより東の方にあり。脇田村に屬せり。今の紙すく所本谷は、犬鳴とはいはず。然ども近年はすべて犬鳴山と稱す。大河内一谷の内、左右すべて九谷あり。大河内の外にも此山中に炭がま多し。犬鳴山凡三里四方あり。近年は犬鳴にて陶器を作らず。又炭をもやかず。大山の木もなくなりし故なり。

○大賀畑

下は惠原より、上は苧柄畑をがらはたの上、八木山の境にいたり、深山幽谷の中四里ばかりあり。其間所々小村多し。すべて大賀畑と云。其川下より谷に入て上る次第は、惠原えはら、千石原、力丸りきまる、小川こ、五郎の谷、苧柄畑あり。皆せばき谷中にあり。秋月の上なる江川の谷にひとし。五郎の谷は本谷筋にあらず。西より流出る別谷なり。谷の奥深し。民家少づゝ所々にあり。惠原、千石原は宮田村の枝村なり。力丸以下の四村は

し、皆下村の枝村也。下村は山を越て西にあり。此谷川所々に深淵多し。千石原の上、ゆすの木ぶち、長淵、茶臼淵、十人道、千番など云淵多し、何もふかし。就中ゆすの木淵、十人道尤ふかし。其川上は穂波郡八木山より出、川下は宮田村に出て、若宮吉川の川と一になる。大賀畑の上、五郎の谷の南の谷の奥の谷上に、池の河内とて廣き深山あり。五郎の谷の上にはあらず。昔は林木多くしげれり。今は林木少し。深山幽谷也。八木山の北なり。

○蛤かひ殻がら圃はたけ

下木月村の枝村に蛤殻圃と云所あり。其地の圃の中、一段許に地底をほれば、蛤かいがら殻多く出る故に所の名とす。上にはおほくあらはれ見えす、少は顯る。土民是をほりて焼て蛤粉とし、白土に用ゆ。又此郡古門村の枝邑、道中と云所にも蛤殻池とてあり。小山の下なる淺き沼なり。蛤がら甚多し。遠賀郡楠橋くすはし村の境内にも、蛤殻はたけあり。かやうの所他國にもあり。

山城國綴喜郡つぎの田原郷の内、湯谷村に鹽の谷と云所に古き蛤多し。是海邊には十二三里あるところ也。

筑前國續風土記卷之十三終